

ジャカルタ水道事業民営化と都市開発

平成 22 年度入学

茅根由佳

調査地（調査国）インドネシア

キーワード：都市化、開発、水資源問題、民営化、グローバル化

自分の研究テーマについて

ジャカルタの水問題は、過去半世紀の都市近代化と産業の進展に伴う急速な人口増加によって顕在化してきた都市問題である。水資源への需要は格段に上昇したが、都市の水道インフラの拡充は未だ十分とは言えず、既存の上水道さえ、その老朽化と頻繁な断水、漏水、産業・生活排水による水質の汚染等多くの問題を抱えている。このような問題へ対応するため、ジャカルタ州政府は 1997 年経済危機の後、構造調整改革を推進し州の水道公社を民営化した。結果として、事業における初期投資費用回収の収益が見込みやすい上・中間層地域においては、上水インフラ普及率が着実に拡充している。しかし低所得者層地域への水道のような公共インフラ投資は、費用回収リスクが高いため、民間企業による事業対象の範疇からは取り残されつつある。

経済の自由化と規制緩和、民営化というグローバルな潮流によって、ジャカルタでも都市化と開発の政策的問題領域が「公」から「私」の管轄へと移行しており、ネオリベラルな市場主義的公共事業改革が都市空間における新たな階層的格差と地域的差異を浮かび上がらせつつある。そこで本研究では、ジャカルタ水道事業民営化を、市場の原理によって都市空間の再編を促した政策の一契機と捉え、現代ジャカルタで営まれる社会生活のなかで都市インフラと居住空間における地理的開発・近代化の不平等状態が、いかなる形で顕在化し今日の都市空間の様相に表れているのか検討していきたい。



ジャカルタ郊外（上）路地裏の低所得者層居住区（下） ジャカルタ郊外都市中心部

フィールドスクールで得られた知見について

今回のフィールドスクールでは、北タイにおける環境・開発問題に携わる NGO 活動家の方にツアーを主催していただき、その活動地域の現場である農村を訪れ、地域コミュニティのリーダーの方に話を伺った。彼らの活動の現場を実際に見学し、現実的な環境問題への取り組みがいかにより多くの困難を抱え、その地道な活動努力が重要であるか、直接に知ることができ、それまでの自身の問題認識の浅さを実感した。今回私達が経験できたように、実際に現地へ赴き、ローカルな視点から問題を考え、現場で取り組みを行っている方々の経験を知ること、自身の見識を深めることは、実務家を志すうえで不可欠な要素であるだろう。フィールドの現場から自分自身の目と耳で、現地社会とそこでの問題について学ぶことは、文献や資料のみからは得られない貴重な視点を提供するものである。また、他の参加学生や現地の活動家、最終日に行ったチェンマイ大学の先生方など、様々な立場の人々の意見を聞くことができたという点でも、自身の問題認識を相対化して捉えなおす良い機会となった。

私にとって、本プログラムは、将来に向けた実践的な活動と自身の問題意識を培っていくうえで、より包括的・多面的な視点を提供する有意義な学習経験になったと思う。

フィールドスクールで学んだことをどのように研究テーマにいかせるか？

本フィールドスクールに参加し、タイの森林問題を軸に資源と開発、環境について学んだことで、自身の研究を相対化する視点の重要性を改めて認識できた。今回のタイの問題と自身の研究には一見関連性を見出しにくいのが、両者は根底的に、近代化と開発そしてグローバル資本主義経済の浸透によって生じた国内社会の地域格差など、現代社会の歪みを象徴する問題を共有している。つまり、表面的に異なる様相を示すような両地域の問題のなかから共通点を見出し、両者を比較してみることで初めて見えるものが、各々の地域の社会背景、歴史、文化の地域的特質であるといえる。このように相対化の視点を持つことで、ジャカルタの水道事業民営化と水資源問題がいかなる地域性を持った政治的、社会的土壌のなかから立ち表れてきた問題なのか、一地域研究としての意義を見出せるよう、今後掘り下げていきたいと思う。



チェンマイ、都市中心部



タイ北部、ホイボン郡の農村